

中国大連市・ハルビン市集合住宅に住む高齢者夫婦の住まい方の特徴

—都市在宅高齢者の住空間計画に関する研究—

THE LIVING STYLE OF ELDERLY COUPLES IN COLLECTIVE HOUSING
IN DALIAN AND HARBIN, CHINA

A study on the planning of living spaces for elderly living in urban areas

林 文 潔*¹, 西村伸也*², 高橋百寿*³, 野口孝博*⁴
陸 偉*⁵, 月館敏栄*⁶, 森下 満*⁷, 周 博*⁸Wenjie LIN, Shin-ya NISHIMURA, Yuzumi TAKAHASHI, Takahiro NOGUCHI,
Wei LU, Toshiei TSUKIDATE, Mitsuru MORISHITA and Bo ZHOU

The purpose of this study is to propose living space planning suited to the needs of the elderly. In this paper, the analysis focuses on the sleeping mode, the place in the daily living space and the contact between elderly couples living in collective housing in Dalian and Harbin in China. The main findings are as follows. 1) About half of the elderly couples want to have separate bedrooms. The actual situation and wishes regarding sharing a bedroom or having separate bedrooms are related to family structure, the number of rooms and area of every generation in a family. 2) The place husband and wife take in the daily living space is related to whether they share a bedroom or have separate bedrooms, what they want to do in the daily living space and the choice of the seat. The form of contact is affected by their actions in contact and the elderly couples' age and health condition. 3) The sleeping mode changes according to the age and the health condition of the elderly. The elderly couples take a middle way as a transition from sharing a bedroom to having separate bedrooms. Moreover, they take the middle way too even after they change to having separate bedrooms because of the consideration of their physical condition and the necessity of nursing.

Keywords: collective housing, elderly couples, living style, shared bedrooms, separate bedrooms
集合住宅, 高齢者夫婦, 住まい方, 同寝, 別寝

1. 研究の背景と目的

1982年、中国では65歳以上の人口が4.91%を占め、1990年5.57%、2000年6.96%と増加している^(注1)。中国の高齢化は、高齢者人口の絶対数の多さと同時に、高齢化の進展の速さが特徴である^(注2)。1990年代、福祉分配から商品化への住宅制度改革が本格的に始まり、1999年以降、都市部では住宅建設面積が毎年5億平米を超えており^(注3)、農村より高齢化が進んでいる都市部では、高齢化に対応した集合住宅の計画は焦眉な課題となっている。

中国の都市集合住宅における空間構成や住様式に関する研究は、友清貴和(鹿児島大)による中国解放後から1980年代にかけて庁の出現と発展過程及び庁の形態と機能を分析した研究^(注4)や、王青(東京大)らによる天津市の单元式住宅における行動場面を通して住様式の特徴を捉えた研究^(注5)、表野聖子(大阪市立大)らによる都市

別の特徴に注目した集合住宅の平面構成と接客空間に関する研究^(注6)、上北恭史(筑波大)らによる食事空間と平面構成の変化との関連に着目した研究^(注7)等がある。高齢者居住に関する研究は、藤田忍(大阪市立大)らが高齢者と子、孫との関係を中心に、人的な交流と高齢者世帯の住空間から見る都市高齢者の「支えあい居住」についての特徴を分析し^(注8)、曹文燕(東大)らは天津市集合住宅団地の高齢者を対象に、外出行動の内容、範囲、交流行動、場所の選択等の特徴をまとめ、住居内部での生活については部屋の使い分け、家族の共用空間及び食寝分離・食居分離について論及した^(注9)。曹文燕は論文の中で「夫婦とも健在である調査対象のうち約半数(7/15例)は夫婦別室就寝をしている」ことを報告している。

同室・別室就寝は高齢者の住い方において一つのキーワードとなっているが、まだ十分な研究がなされていない。高齢者の住要求

*1 新潟大学大学院自然科学研究科 博士後期課程・工修

*2 新潟大学工学部建設学科 教授・工博

*3 新潟大学工学部建設学科 技術職員

*4 北海道大学大学院工学研究科 教授・工博

*5 大連理工大学建築芸術学院 教授

*6 八戸工業大学工学部建築工学科 教授・工博

*7 北海道大学大学院工学研究科 助手・工修

*8 大連理工大学建築芸術学院 助教授・工博

Ph. D. Student, Graduate School of Science and Technology, Niigata Univ., M. Eng. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Niigata Univ., Dr. Eng.

Technical Staff, Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Niigata Univ., Dr. Eng.

Prof., Graduate School of Eng., Hokkaido Univ., Dr. Eng.

Prof., School of Architecture and Fine Art, Dalian Univ. of Technology

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Hachinohe Technical Univ., Dr. Eng.

Research Assoc., Graduate School of Eng., Hokkaido Univ., M. Eng.

Assoc. Prof., School of Architecture and Fine Art, Dalian Univ. of Technology, Dr. Eng.

は加齢や健康状態、家族構成等の影響を受けて変化することが想定され、そのような変化に対応した同室・別室就寝の居住形態を明らかにすることは、高齢者の住宅を計画していく上で大きな課題であると考えられる。

本稿は、中国東北部の代表的な都市である大連市、ハルビン市をとり上げ、集合住宅に住む高齢者夫婦の就寝様態を調べ、居場所の拠点や夫婦の接点^(注10)のとり方とその理由及び年齢・健康状態等との関連を明らかにすることが目的である。その上で、高齢者のための安全で居心地のよい住空間形成の計画指針を探ろうとするものである。

2. 調査概要

調査は、大連市とハルビン市にある集合住宅団地に住む60歳以上の高齢者を対象とし、アンケート調査とヒアリング・実測調査・写真撮影を行った。調査の期間、件数と調査内容を表-1に示す。

表-1 調査概要

	アンケート調査	ヒアリング・実測調査
大連	2001年8月～9月 回答数：125名(男70名/女55名)	2000年12月～2001年1月(1回目) 2001年8月～9月(2回目) 調査戸数：20戸(配偶者あり:17戸)
ハルビン	2001年8月 回答数：138名(男81名/女57名)	2001年8月 調査戸数：19戸(配偶者あり:16戸)
調査の内容	1. 調査対象者の属性 2. 住居と居住生活 間取り、夫婦同別寝の現状と希望、 近所付き合い、冬期に困ること等 3. 屋外活動の内容、頻度及び冬の変化 4. 自立段階と要介助段階の居住意向	1. 住居の平面構成と各室のしつらえ 2. 食寝居、接客、団樂の場所 3. 冬期と夏期生活場所の変化 4. 食品保存等冬期の特徴的な生活 5. 住居のリフォーム箇所 6. 住居や環境への要望

2.1 調査対象団地の概要

調査対象団地の建設年代、住戸数、主な住戸型及び団地の特徴を表-2に示す。中国の集合住宅の平面構成は、「庁」の変容により「無庁」、「小方庁」、「一厅」、「二庁」^(注11)に分けられる。

表-2 調査対象団地の概要

団地	建設年代	住戸数	住戸型	周辺環境及び団地特徴	
大連	XL	80年代初期	1728	無庁型 小方庁型	買物不便、鉄道や交通幹線に近いから騒音が大きい。緑化環境はよくない
	LM	80年代後期	1476	無庁型 小方庁型	山坂に立地し山頂に公園があり、緑化環境はよい。団地内高齢者の活動室がある。病院、銭湯に遠い
	XF	90年代中期	867	一厅型 二庁型	売店が多くて騒音が大きい。住棟間隔が狭く活動場所は足りない。緑化環境はよくない
	CH	90年代後期	510	二庁型	緑化環境はよく、団地内幼稚園、小学校、銀行、図書館など完備しているが高齢者の集会所がない
ハルビン	XF	80年代中期	1152	無庁型 小方庁型	低収入者向け、ハルビン市初めての集合住宅団地である。緑化環境や公共施設は整備されていない
	FR	80年代中期	1536	小方庁型	緑化環境や公共施設は整備されていない
	JW	90年代初期	596	無庁型 二庁型	低収入と中高収入者向け二種類の住戸型があり、都心に近く、交通便利
ハルビン	MJ	90年代中期	937	小方庁型 一厅型 二庁型	ハルビンの模範団地として公園や屋外活動場所、運動器具など完備している

2.2 調査対象者の概要

(1) 年齢と健康状況

アンケート回答者の平均年齢は大連68.82才、ハルビン70.12才である。また、70才以上の方の割合は大連44.0%、ハルビン48.6%、である。(図-1)

健康な高齢者(「とても健康」、「無理はきかない」)は大連71.2%、ハルビン80.5%を占めており(図-2)、病気を抱える高齢者(「病気がち」、「寝ていることが多い」)の割合は60代17.7%、70代30.6%、80代33.3%である(図-3)。70才を境に健康状態の変化する傾向が認められる(x²検定でP=0.015)

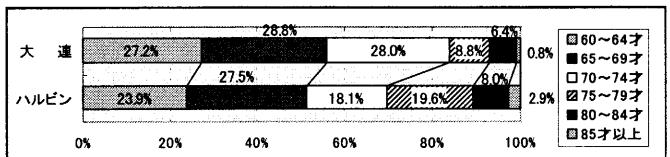


図-1 調査対象者の年齢分布

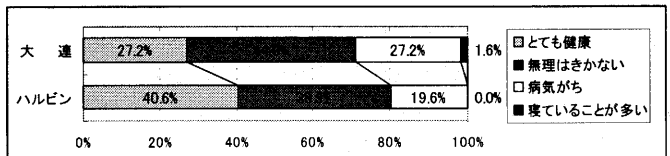


図-2 調査対象者の健康状況

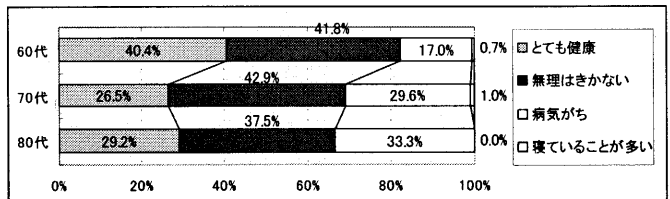


図-3 年齢別に見る調査対象者の健康状態

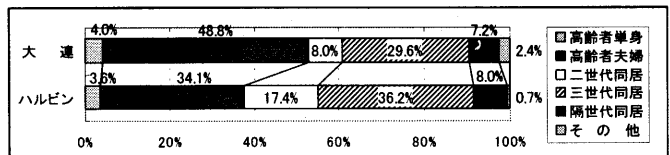


図-4 調査対象者の家族構成

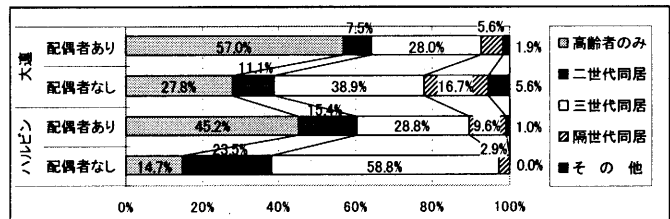


図-5 配偶者有無による家族構成の比較

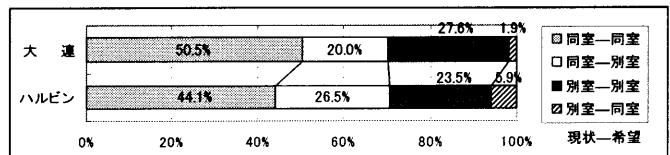


図-6 同室・別室就寝の現状と希望

(2) 家族構成

大連、ハルビン共に高齢者夫婦世帯の割合は高く(大連48.8%、ハルビン34.1%)、子供と同居する世代が大連37.6%、ハルビン53.6%を占める(図-4)。配偶者がいる場合は、高齢者世帯を形成し、配偶者がいない場合は、子供と同居する傾向がみられる。(図-5)

3. 同室・別室就寝の特徴

本稿では、夫婦が一つの部屋で就寝するものを「同室就寝」、別々の部屋で就寝するものを「別室就寝」とする。

3.1 同室・別室就寝の現状と希望

現在、同室就寝は大連70.5%、ハルビン70.6%で、同室就寝で別室就寝を望んでいるのは大連20.0%、ハルビン26.5%である。夫婦の別室就寝希望は大連47.6%、ハルビン50.0%となっており、約半数が別室就寝を希望していることと、別室就寝の希望がかなえられていない割合が比較的高いことが特徴である。(図-6)

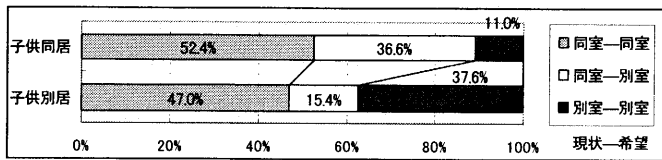


図-7 子供同居の有無による同室・別室就寝の現状と希望

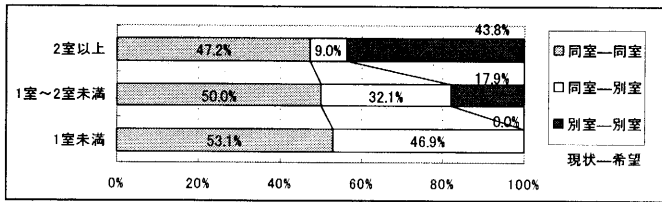


図-8 世代当り室数による同室・別室の現状と希望

図-7に示すように、同室就寝夫婦の別室就寝希望は、子供と同居している場合に36.6%と高い。子供との同居では、現状としての同室就寝が多く、別室就寝を希望している高齢者夫婦の7割強は希望を実現していない。(x²検定でP=1.58E-5)

3.2 室数・面積と同室・別室就寝

図-8に示すように、同室就寝の夫婦での別室就寝希望について見ると、世代当りの室数が(注12)「1室未満」の場合には、46.9%と高い割合を示す。これは別室就寝希望の全てが同室就寝となっているため、「2室以上」の場合は9%となり、43.8%は別室就寝を実現している。(x²検定でP=1.05E-7)

同様に、図-9に示すように、世帯当りの居住面積が増えるにつれて、別室就寝は多くなり、世代当り「50~70㎡未満」の場合には就寝に対する希望がほぼかなえられている。(x²検定でP=1.27E-6)しかし、面積がさらに増えて世代当り「70㎡以上」になると、別室就寝がかなえられない割合がまた増加している。「70㎡以上」と「50~70㎡未満」では子供との同居率はほぼ変わらないが、「70㎡以上」では、70代の割合が若干高く、別室就寝の実現には家族構成以外にも、例えば、夫婦の年齢・健康状態・生活等の影響が考えられる。

4 同室・別室就寝での拠点と接点

実測調査を通して、夫と妻の居場所とその接点形成のあり方が就寝様態とどのような関係をもつかを以下で考察する。

4.1 居場所の拠点

(1) 夫と妻の拠点のとり方

高齢者夫婦が使える部屋が2室以上ある場合に、拠点を同じ部屋とするものが同室就寝では9/15例あり、別室就寝では3/14例と少ない。逆に、拠点を別室とする場合は、同室就寝では6/15例、別室就寝では11/14例となっている(表-3)。

客厅のある住居では、図-10に示すように、夫婦が拠点を同室とする時は客厅が多く、拠点を別室とする場合には、同室就寝(6例)と別室就寝(5例)では庁と寝室の使い分け方は異なるのが特徴である。同室就寝では、「夫は庁・妻は寝室」が多く(4/6例)、別室就寝では、「妻は庁・夫は寝室」が4/5例となり、庁を拠点とする夫と妻の割合が逆転している。

(2) 拠点での行為と座の選択

表-4に示すように、拠点での中心的な行為は妻は「テレビ」の見ることで、夫は「新聞・本」を読む割合が高い。また、座の選択は図-11に示すように、夫は椅子13例(その内机に向かう場合が8例)・

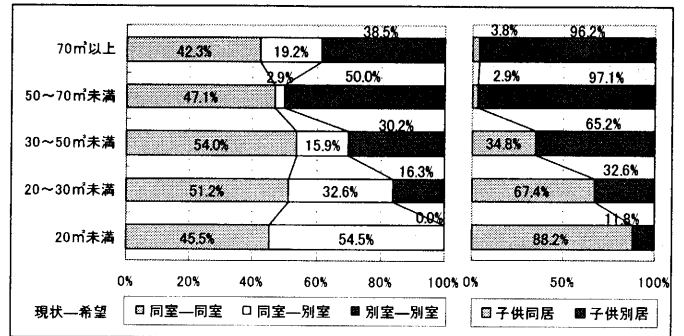


図-9 世代当り面積による同室・別室就寝の現状と希望 / 子供同居の有無

表-3 拠点と就寝様態 (2室以上)

(合計: 29例)	拠点を同室	拠点を別室
同室就寝 (15例)	9例	6例
別室就寝 (14例)	3例	11例

表-4 拠点での行為

(合計: 33例)	夫	妻
テレビ	6例	18例
新聞・本	12例	4例
テレビ+新聞・本	11例	9例
その他	4例	2例

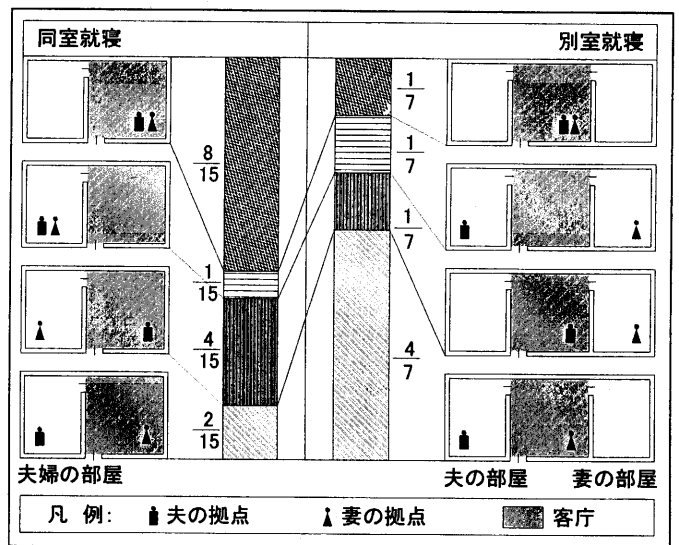


図-10 客厅のある住居での拠点の取り方

拠点を同室とする(16例)	事例
夫 妻 例数	
夫 妻 3例	DL17 DL09 客厅 夫婦の寝室
夫 妻 6例	
夫 妻 1例	
夫 妻 4例	
夫 妻 2例	
拠点を別室とする(17例)	
同室就寝(6例)	HB08 客厅 夫婦の寝室
夫 妻 1例	
夫 妻 3例	
別室就寝・客厅なし(5例)	DL02 妻の寝室 夫の寝室
夫 妻 1例	
夫 妻 2例	
別室就寝・客厅あり(6例)	HB19 妻の寝室 夫の寝室 客厅
夫 妻 1例	
夫 妻 3例	

図-11 夫と妻の拠点の座

ソファ13例で椅子座が多く、ベッドは7例と少ない。逆に、妻はベッド17例・ソファ16例と多く、椅子の利用はない。夫がベッドを座としている7例は、夫が病気がち或は部屋が狭い場合に限られている。病気になった時には、寝室を拠点とする傾向が認められた(夫7/7例、妻4/5例)。その場合は夫4/7例、妻4/5例でベッドが拠点の座になる。座の選択に関して、夫は椅子かソファを好み、妻はペット・ソファを利用する傾向が強いことがわかる。

中国の寒冷地域における都市集合住宅では、ラジエーターが窓の下に設置され、暖をとるためにベッドをラジエーターの近くに置く。図-12に示すように、同室就寝の場合夫婦の寝室では、窓の近くにダブルベッドが置かれ机は窓から遠くなり、新聞を読むための明るい場所はベッドの上か客厅となる。一方、別室就寝の場合、夫のシングルベッドと読書のための机が窓の近くに置かれる。

つまり、夫は新聞・本を読むために、庁(同室就寝の場合)・寝室(別室就寝の場合)を選ぶことになる。これに伴って、妻はテレビを見る場として、寝室(同室就寝の場合)・庁(別室就寝の場合)を使い分けられていると考えられる。

4.2 夫婦の接点とその行為

夫婦が接点として持つ場を見ると、図-13に示すように分けられる。①「同室」：夫婦の拠点が同室で接点となる。②「相互」：お互いに相手の拠点に移動し、接点が2つ形成される。③「妻中心」：夫が妻の拠点に移動し、妻の拠点が夫婦の接点になる。④「独立」：接点を持たない。同室就寝の場合には夫婦と一緒に過ごす時間がより多く、別室就寝の場合には、夫婦は各自の拠点をもちながら自室や共有空間を接点とする特徴が見られる。

「相互」と「妻中心」の13例において接点での行為を見ると、夫婦と一緒に「テレビを見る」(12例)や「お喋り」(3例)、「ボード・ゲーム」(1例)があり、その他に、「夫は新聞を読む・妻は窓から眺める」(1例)、「夫はラジオを聞く・妻は物をする」(1例)のような夫と妻の行為が異なる例もある。夫婦と一緒に「テレビを見る」は最も多く見られた接点での行為で、夫婦の接点が「夫中心」ではなく「妻中心」となるのは、妻がテレビのある場所を拠点とし、夫がテレビを見たい時に妻の拠点に移動することが要因であると考えられる(拠点においてテレビの保有率：夫3/13例、妻11/13例)。

年齢と健康状態から接点との関連を考察してみると、表-5に示すように、60代の接点は「同室」・「相互」が中心で、70代で健康の場合は「妻中心」、70代で病気の場合は「独立」へと変化している。これは、加齢に加えて健康状態の変化が原因だと考えられる。図-14に示すように、70代夫婦で接点が「独立」の「HB05」は、夫が病気で妻の部屋に行くことが少なく、「DL10」は夫婦とも病気となっている。客室が看病に訪れる娘の部屋となりベッドが2つ置かれていて利用できない。どちらも高齢・病気によって相互の部屋に夫婦の接点を持ちえていない。また、一方が病気で接点が「相互」の2例は、病気になった夫または妻の寝室と客厅や書斎が接点となっている。

5 中間型同別寝

実測調査では、夫婦は主に同室就寝であるが時々別室就寝をしたり、主に別室就寝であるが時々同室就寝をするといった中間的な就寝も存在している。また、同室就寝の中でも別々のベッドで就寝している例も見られた。本稿では、同室就寝でもベッドを分けて

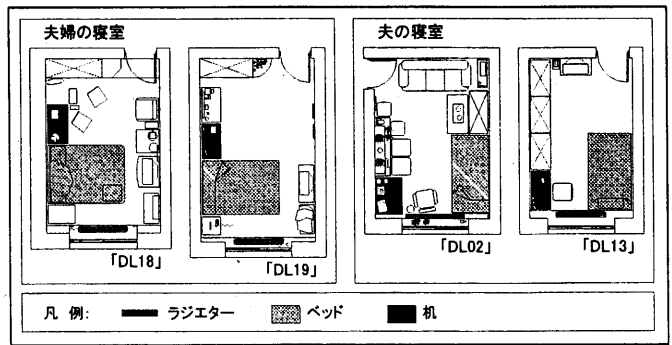


図-12 寝室においてベッドと机の置き方

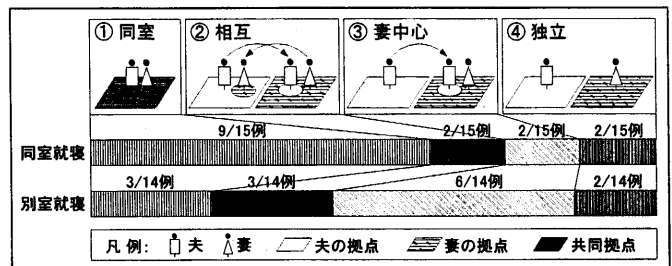


図-13 接点の形態

表-5 年齢と健康状態別に見た接点の形態

	同室	相互	妻中心	独立
60代・健康	7	2	2	
60代・病気	2	1	1	
70代・健康	2	1	4	1
70代・病気	1	1	1	3

(「70代」は片方のみ70代を含め、「病気」は片方のみ病気を含める)

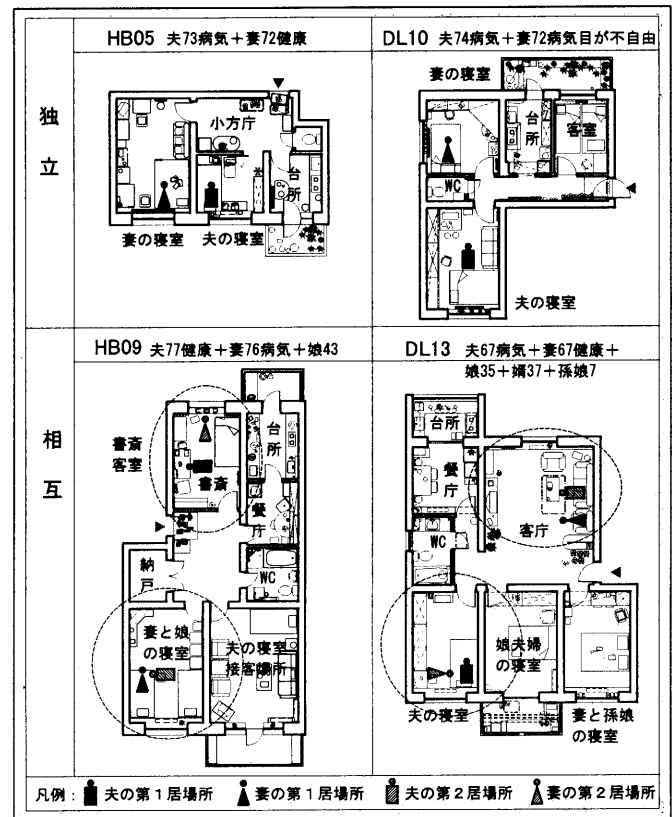


図-14 接点は「独立」と「相互」の事例

いるものを「分寝」とし、ベッドを分けていないものを「同寝」とする。そして、常に別室就寝するものを「別寝」とし、「分寝」を含

む中間的なケースを併せて「中間型同別寝」(中間型)と名付ける。
 今回の調査で高齢者夫婦を含む33世帯の中では、同寝と別寝は各

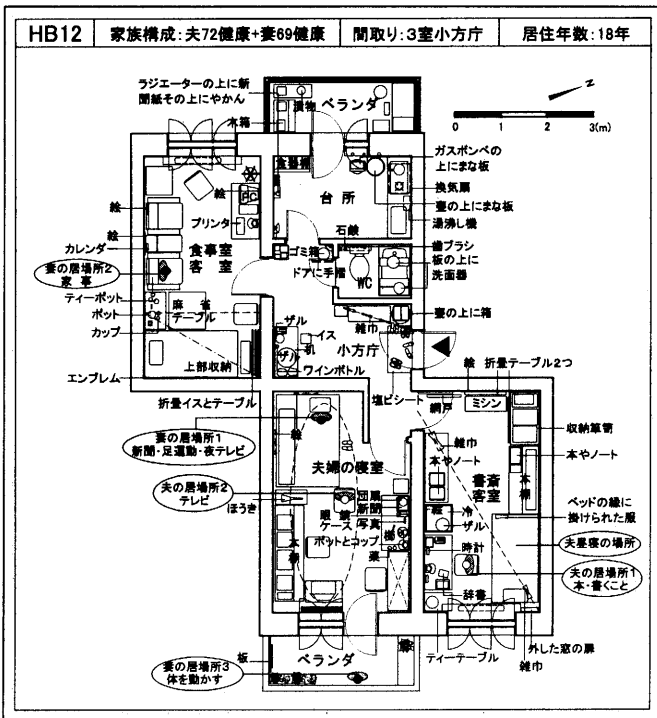


図-15 中間型の事例

12例であり、中間型は9例を占めている。ここでは、中間型の事例と就寝の様態、中間型が形成される要因を分析する。

5.1 中間型同別寝の事例

「HB12」は「夜同寝・昼別寝」の事例である。夫婦2人は「3室小方庁」の住居に住んでいる。一番広い部屋は夫婦の就寝室で、隣の部屋は夫の書斎となっている。夜夫婦はダブルベッドで就寝するが、昼間には夫は書斎にあるシングルベッドで昼寝をしている。夫と妻の拠点は別室で、妻の拠点は夫婦寝室のベッドとなっている。テレビを見ながらマッサージを行い、時には西側の部屋にあるソファーに座って料理の支度をし、夏には、ベランダが妻が体を動かす場所となっている。夫は書斎の窓側に置いてある机にすわり、本を読んだり書くことをしたりする。テレビは夫婦の寝室で椅子をベッドの側に置いて妻と一緒に見ている。(図-15)

「2室小方庁」で三世代同居の「DL01」では、夫婦は孫娘と同室就寝である。妻は孫娘のベッドで昼寝をし、息子夫婦の寝室で横になることもある。「HB03」では夫婦が「2室2庁」の住居に住んでいる。夜夫婦は同室就寝で、昼間には妻が客厅のソファーで昼寝をしている。夏期になると、夫婦の寝室は妻の寝室となり、夫は客室を使い、夫婦は別室就寝をしている(図-16参照)。このように就寝場所の変化は一つに限らない例も見られる。就寝場所の多様な変化は、就寝様態に多くの可能性があることを示している。

5.2 中間型同別寝の就寝様態

実測調査では多様な中間型の就寝様態が見られた。それらは図-16に示すように同寝と別寝・分寝の組み合わせで5種類となる:①「同寝+分寝」:夜は夫婦で同寝するが、昼間に夫か妻が同室にあるシングルベッド或いはソファーで昼寝する(2例)、②「分寝」:夫婦は各自のベッドに同室で就寝する(2例)、③「同寝+別寝」:主に同寝するが、昼間或いは夏期だけ夫婦は別寝をする(3例)、④「別寝+同寝」:主に別寝するが時には同寝する(1例)、⑤「別寝+分寝」:夜別寝するが、昼間に同室にある別々の寝具で就寝する(1例)。

図-17、18に示すように、「中間型」の割合は、60代の場合には2/17例だが、片方が70才を超えると、7/16例と増え、70代では「中間型」が割合として一番多くなっている。加齢によって、生活のリズムや体感温度の違い、安眠のための工夫等の理由で、別寝希望が増えてくる。しかし、部屋の数の不足或はどちらかの同寝要求によって別寝に移行できない場合に、中間型で対応していると考えら

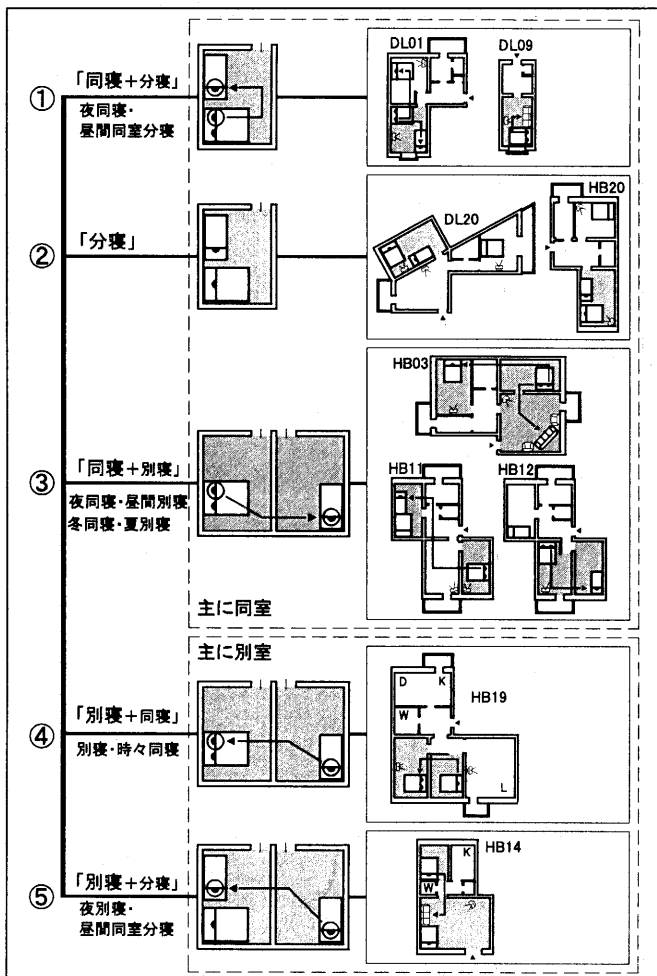


図-16 中間型の就寝様態

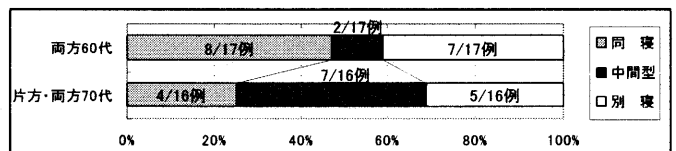


図-17 年齢と就寝様態

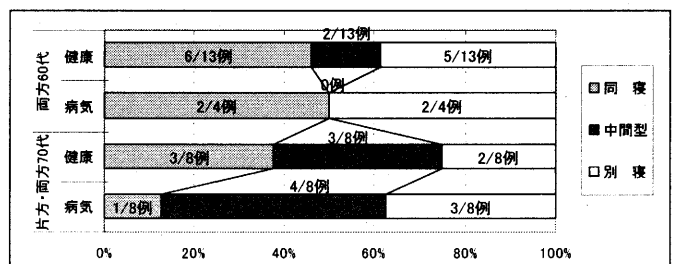


図-18 年齢・健康状態から見る就寝様態

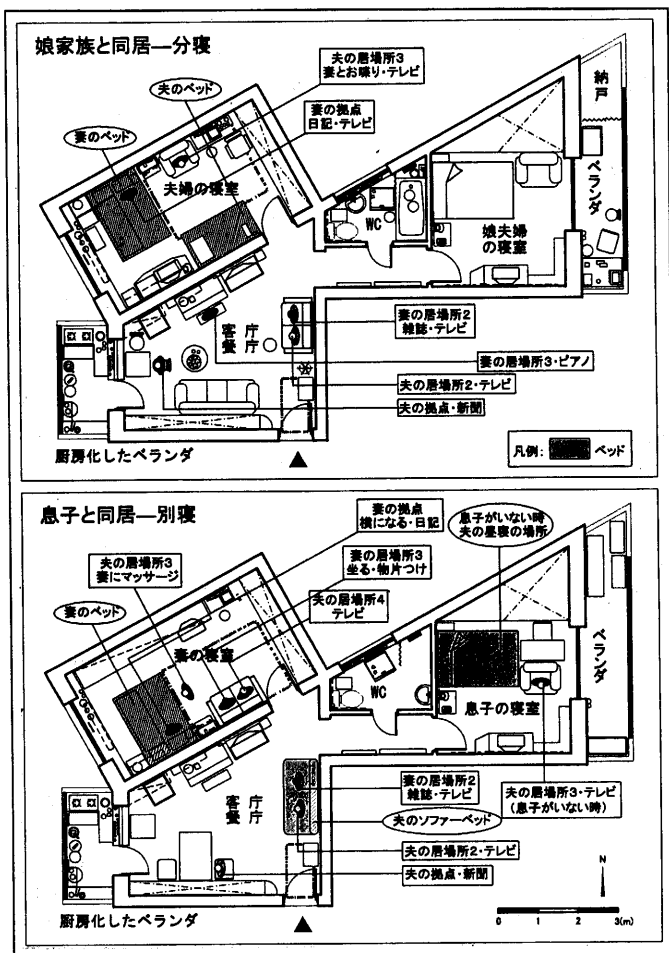


図-19 就寝様態移行の事例「DL20」

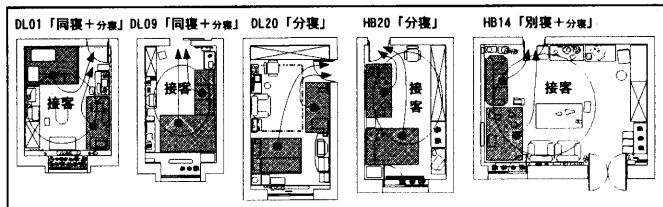


図-20 「分寝」における寝具の置き方

れる。また、別寝希望の夫婦の中でも、片方の体調が悪い場合に、中間型をとる事例も見られる。

高齢者の就寝様態は固定しているものではなく、年齢や健康状態の変化によって、就寝様態も変わると考えられる。

5.3 中間型における拠点と接点の特徴

夫婦の拠点が別室の割合は、同寝3/11例、中間型4/6例、別寝の場合には10/12例である。中間型の多くは片方が別寝を希望しており、別寝の場合と同様に拠点も分ける傾向が高い。そして、夫婦の拠点が同室の場合でも、夫婦は必ず別々のベッドか片方がソファを使い、共用する空間の中で各自の領域を分けている(中間型では7/7例、別寝では2/2例、同寝では3/9例)。また、昼寝等に使用される一時的な別室就寝の部屋は就寝者の拠点とはなるが、夫婦で一緒に過す場とはなっていない。

5.4 就寝様態の移行

図-19に「別寝」から「中間型」への移行が確認された事例を示す。「DL20」については1996年の入居から現在までの変化を確認し

ている。入居当時は夫68歳、妻66歳で「別寝」。「別寝」は入居より10年前からの就寝様態で、夫が妻の不眠を気遣った結果である。

調査の時に確認された「別寝」から「分寝」への移行は、2001年の娘家族3人との同居による。夫の寝室は娘夫婦が使い、孫娘は庁で就寝する。二室一厅の住居では「別寝」は継続できず、面積の広い妻の寝室で「分寝」のかたちをとった。

2003年に娘夫婦が別居後は息子が同居。夫婦の寝室や庁の設えを変えて夫が庁を寝室とし、「分寝」から「別寝」へと移行した。体調を崩し始めた妻は寝室で過ごす時間が多くなり、妻の寝室が庁と隣接しているため、別室にいてもお互いに安心感があり、庁(夫)と寝室(妻)を拠点とし相互に移動し、接点としている。

妻の体調を考えると寝室間での通話システムも検討しているが、妻の健康状態に応じて庁での「別寝」や妻の寝室での「分寝」も選択できるように、ベッドを準備している。

このような場合、「別寝」への移行には部屋の数が要求されるが、「分寝」への移行には部屋の面積が必要となる。「中間型」の中で「分寝」を含む5例の家具配置を図-20に示す。いずれもダブルベッドとシングルベッド(或はソファベッド)の組み合わせで、L字配置に特徴がある。それぞれの寝具から入口への移動がスムーズになると同時に、必要に応じて接客にも使われることや、共用空間を広く使う工夫から壁に沿った配置となっている。

図-21に示すように、高齢者夫婦は「同寝」から「別寝」への移行手段として「中間型」で対応している。2室以上ある場合には、③「同寝+別寝」、④「別寝+同寝」、⑤「別寝+分寝」の中間型を経て「別寝」へと向かい、2室ない場合には、①「同寝+分寝」、②「分寝」の「分寝」をとりいれながら、「別寝」へと向かう。また、「別寝」へ移行してからも「中間型」をとりいれている。子どもの同居や別居に伴う部屋数の変化、夫婦間での体調に関する配慮や病後の介護の必要性など、変化し続ける状況に対応する方法として「中間型」は利用されている。

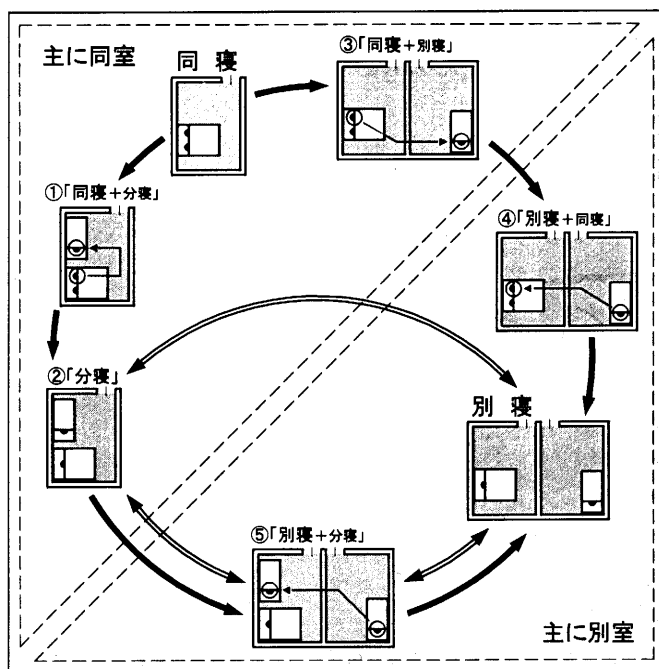


図-21 就寝様態の移行

6 まとめ

本稿の分析を通し、以下のことを明らかにした。

(1) 同室・別室就寝の特徴

夫婦の別室就寝希望率は約半数で、別室就寝希望に対応できていない割合は2割を超えている。同室・別室就寝の現状と希望は家族構成・世代当りの室数や居住面積との関連が認められた。特に世代当り面積50～70㎡は、別寝と同寝の傾向を分ける境となっている。

(2) 居場所の拠点と夫婦の接点

同室就寝では拠点も同室、別室就寝では拠点も別室の傾向が強い。

拠点では、夫は椅子やソファを好み、明るい所で新聞を読む。妻はソファー或いはベッドを利用し、テレビを見る傾向があり、このことが夫と妻の寝室と庁の使い分けにつながっていると捉えられた。

接点について、接点での行為、夫婦の年齢と健康状態は接点の形態に影響している。

(3) 中間型同別寝

同寝と別寝に分類しきれない「中間型同別寝」が存在している。

70才を超えると、中間型が多くなっている。特に病気になってからは同寝が減少し、中間型や別寝で対応する事例が多くなる。高齢者の就寝様態は年齢や健康状態等によって変わっている。中間型における拠点・接点の取り方は、別寝と似ている。

体調への配慮、介護の必要から、変化する状況に対応する方法の一つとして、中間型同別寝がとられていることが分かった。

就寝様態の多様な変化に柔軟に対応するために、寝室は中間型「別寝+分寝」のように2室あり、1室が2つのベッドを垂直配置できれば、比較的寝様態の様々な変化に対応できる。また、2室が間口方向或いは奥行き方向に続けて配置され、病気になった時には、お互いの動きが分かるような空間のつながりが望まれる。中間型は同寝から別寝への移行の段階で現れる場合と別寝から移行する場合があり、このような変化に対応できる機能を計画することが必要であると思われる。

本稿では、大連市・ハルビン市の集合住宅に住む高齢者夫婦の就寝様態及び拠点と接点のとり方についてまとめた。しかし、高齢者夫婦の住要求や健康状態の変化による移行のプロセスについては、今後さらに調査していくことは必要である。

謝辞

調査にご協力頂いた高齢者の皆様、及び清華大学周燕珉助教授、当時大連理工大学院生郭銳、吳素亭、高旭、大連市教育局嚴鵬、ハルビン工業大学常懷生教授、李健紅助教授、鄒広天教授、院生艾英旭、施煬に感謝申し上げます。

注釈

- 1) 中華人民共和国国家統計局：中国統計年鑑2004，pp.97，中国統計出版社，2004.9
- 2) 国家統計局人口和社会科技統計司：中国人口統計年鑑2001，pp.283，中国統計出版社，2001.11
- 3) 中華人民共和国国家統計局：中国統計年鑑2004，pp.392，中国統計出版社，2004.9
- 4) 友清貴和：庁型住宅の発展過程と庁の役割（中国の都市住宅に関する研究），日本建築学会計画系論文集，第458号，pp.53～61，1994.4
- 5) 王青，横山ゆりか，鈴木毅，高橋應志：天津市の单元式住宅における住様式に

- 関する研究（中国都市住宅における住様式の研究 その1），日本建築学会計画系論文集，第479号，pp.77～85，1996.1
- 6) 表野聖子，藤田忍，中川まき，梶浦恒男：中国における都市集合住宅の平面構成と接客空間に関する研究（その1 平面構成の地方性），日本建築学会大会学術講演梗概集（中国），1999.9
中川まき，藤田忍，表野聖子，梶浦恒男：中国における都市集合住宅の平面構成と接客空間に関する研究（その2 接客空間の分析），日本建築学会大会学術講演梗概集（中国），1999.9
 - 7) 上北恭史，谷村秀彦，渡辺俊：中国の集合住宅における食事空間の考察，日本建築学会計画系論文集，第569号，pp.15～21，2003.7
 - 8) 藤田忍，表野聖子：中国の都市高齢者世帯における支え合い居住に関する研究（高齢者と子，孫との関係を中心に），日本建築学会計画系論文集，第551号，pp.253～258，2002.1
 - 9) 曹文燕，長澤泰，山下哲郎：天津市中層集合住宅団地に住む高齢者の生活様態とその特性（中国都市部の高齢化に対応する集合住宅の建築計画の研究），日本建築学会計画系論文集，第490号，pp.73～81，1996.12
 - 10) 高齢者は複数の居場所を持つ場合があると思われる。本研究では、居場所の中で、高齢者が一番長くいる場所を居場所の「拠点」と定義する。そして、就寝以外で、夫婦が同一部屋で一緒に時間を過ごすことを夫婦の「接点」と定義する。
 - 11) 本研究において、「無庁型」・「小方庁型」・「一庁型」・「二庁型」を以下のように定義する。
「無庁型」：廊下で各部屋を繋いでいる住戸タイプを指す。
「小方庁型」：入口にある廊下を拡大し、窓がなく面積は通常10㎡以下のスペースを「小方庁」という。「小方庁型」はこのような住居タイプを指す。
「一庁型」：窓があり、面積は通常12㎡以上で「客厅」（応接間）や「起居室」（居間）等を機能する空間がある住戸タイプを指す。
「二庁型」：「客厅」（応接間・居間）と「餐厅」（食事室）の2つの庁がある住戸タイプを指す。
 - 12) 室数を同居する世代数で割ったものを「世代当り室数」とする。（例えば、3世代同居の場合は3で割ったもの）。面積を同居する世代数で割ったものを「世代当り面積」とする。
 - 13) 本研究では、「客厅」のない平面タイプを「客厅なし」（「無庁型」と「小方庁型」を含む）、「客厅」のある平面タイプを「客厅あり」（「一庁型」と「二庁型」を含む）とする。

参考文献

- 1) 沢田知子：熟年・高齢期におけるライフスタイルと住まい方の特徴（長寿社会におけるライフコースの充実・支援にむけた住宅計画 その1），日本建築学会計画系論文報告集，第547号，pp.95～102，2001.9
- 2) 沢田知子，渡辺秀俊，谷口久美子，丸茂みゆき：熟年・高齢期におけるライフワーク・人間関係・生き甲斐等に関する考察（長寿社会におけるライフコースの充実・支援にむけた住宅計画 その2），日本建築学会計画系論文報告集，第562号，pp.135～142，2002.12
- 3) 林文潔，西村伸也，野口孝博，月館敏榮，陸偉，森下満，池上重康，岡本浩一，山下義行，常弘陽子：中国大連市集合住宅に住む高齢者の住まい方についての考察（寒冷地域における都市住宅高齢者の居住環境に関する研究 その1），日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）E-2，pp.301～302，2001.9
- 4) 野口孝博，西村伸也，月館敏榮，森下満，池上重康，岡本浩一，林文潔，橋爪隆一，常弘陽子，山下義行，陸偉，周燕珉：庁を中心に見た住空間構成の変化について大連を中心とする中国東北地方の住宅・住様式に関する調査研究（I），日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）E-2，pp.539～540，2001.9

（2005年2月10日原稿受理，2005年9月26日採用決定）